

日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチング —機能的分析を中心に—

Code Switching by Japanese-English Bilingual Students with a Focus on Functional Analysis

宮原 温子
Atsuko MIYAHARA

Abstract

Code switching (CS) refers to the changing of languages in a conversation of bilingual speakers. This paper introduces the background of informants and attempts the functional analysis of CS by using recorded conversations of bilingual speakers. By presenting several examples, the paper considers the functions of CS in areas such as structure, meaning, interdependent uses, linguistic effects, language acquisition, sharing of 'youth' culture, puns and CS signals. In addition, the paper will analyze self-reports of informants, reasons of CS and contribute to the understanding of bilingual conversational style.

Key Words : Code switching, Bilingual, functional analysis

キーワード：コードスイッチング、バイリンガル、機能的分析

1. はじめに

コードスイッチング（以下、CS）とはバイリンガルがインフォーマルな会話の中で使用言語を切り替えることである。バイリンガルの言語使用状況を観察すると、CSがみられ、バイリンガルの中には自らCSの使用を認める者もいる⁽¹⁾。Appel and Muyskenも“Switching is not an isolated phenomenon,⁽²⁾”「CSは孤立した現象ではない。」（拙訳）と言っているが、私たちの多くはCSをごく自然な現象としては受け入れていない。バイリンガル能力は、早期英語教育が導入されることから明らかなように、一般社会では肯定的であり社会的ニーズも高いが、CSに対しては無理解や否定的な見方がある。

近年、日本において、主として英語で教育する大学・学部が増えている⁽³⁾。日本語英語バイリンガル大学生のコミュニティは以前からあったが、このような大学・学部が増えることに

よって、必然的に日本語英語バイリンガルのコミュニティーが増大しているといえる。バイリンガル大学生のコミュニティーは留学生だけでなく、海外で生まれ、生まれたときから日本語と英語の両言語を習得した日本国籍の若者やいわゆる帰国子女や国内のインターナショナルスクールで教育を受けてきた若者など、多種多様な背景を持った若者で構成されている。総務省統計局によると、在日留学生数は1995年には、83,420人、2002年には130,637人、2007年には160,822人であり、増加していることがわかる⁽⁴⁾。法務省による国籍留保数⁽⁵⁾をみると、1986年には4,462人であったのが、1996年には9,881人、2006年には15,050人と、増加していることがわかる⁽⁶⁾。外務省による海外在留邦人数調査統計の地域別子女数⁽⁷⁾の総数をみると1986年は39,393人であったのが1996年は50,080人、2006年は58,304人となり、増加していることがわかる⁽⁸⁾。留学生数、国籍留保数、地域別子女数の増加は、バイリンガルコミュニティーが増大していく可能性を裏付けている。

本稿では、インフォーマントの背景を紹介し、会話記録を資料としてCSの機能的分析を試みる。同時にインフォーマントの自己申告を分析しCSの起因を探る。多言語社会になりつつある日本社会において、CSへの理解を深めることは有意義なことであると思われる。

2. CS

ガンパーズはCSを「二つの異なる文法システムに属する会話の一節を、ことばの一連のやり取りの中で並置すること」⁽⁹⁾と定義づけている。Appel and Muyskenはスイッチングが現れる文の中での位置、語の単位によって、タグスイッチングとコードミキシングとCSの三つに分け、文単位でのスイッチングのみをCSとしている⁽¹⁰⁾。

岡はスイッチングの場所や単位にこだわらないCSの定義を示している⁽¹¹⁾。岡はCSを発話者が交替する時、文と文の切れ目、一つの文の中、いずれにも現れるものとしており、文と文の切れ目に表れるものを文間CSといい、一つの文の中に現れるものを文中CSと呼んでいる。下のYの発話に、文間CS（下線部分）が見られる。

X: Is that, I wonder if that's a good thing or a bad thing.

Y: My dad keeps on telling me it's a bad thing. 実際はどうなのかわからない。

下のZの発話に、一つの文の中に現れる文中CS（下線部分）が見られる。

Z: No it's higher 'cause the one right now is 中級 I think.

CSに近い概念として「借用」と「混用」がある。「借用」とはA言語の要素をB言語に取り込んだもので、普通、語彙の単位で起こり、それは「借用語」と呼ばれている。音韻はB言語のものになる。「混用」とはA言語の要素をB言語に転移させるが、B言語の体系に組み入れら

れず、音韻はA言語のままである。且つ、「混用」は一つの文の中で、単語の単位で起こる傾向があるといわれる。一方、CSは単語よりも大きい単位で文中にあるいは文間で切り替わるものといわれるが、実際には「混用」とCSの区別は難しい。岡はGrosjeanの“code-switch can be of any length (a word, a phrase, a sentence) and is a complete shift to the other language, whereas a borrowing is a word or short expression that is adapted phonologically and morphologically to the language being spoken.”⁽¹²⁾「CSはどの長さ（単語、句、文）も可能でもう一方の言語に完全に交替するものであり、一方、借用は音韻的に形態的に、話されているその言語に適応させた単語、短い表現である」（拙訳）を参考にして、「混用」との区別は放棄し、CSと「借用」は区別して捉えると述べている。本稿では、岡の定義を援用することとする。

日本語英語のCSは、Nishimura⁽¹³⁾、Fotos⁽¹⁴⁾、Kite⁽¹⁵⁾、Furuya⁽¹⁶⁾、服部⁽¹⁷⁾らにより1990年代から研究されているが、ある特定のバイリンガルコミュニティを対象にしたCSの研究はなされていないようである。

3. インフォーマントの背景

日本語英語バイリンガル大学生10人にインフォーマントとして協力を得ることができた。インフォーマントは都内にある二つの大学に所属する学部生9人と交換留学生1人である。年齢は18才から21才で、女性7人、男性3人である。この二つの大学は総合大学であるが、所属学部では主として英語で授業が行われ、いくつかは日本語で行われる。2007年12月26日、27日、2008年1月4日にアンケート回答とインタビューから基本情報を得、その後、2人から4人で、約25分の会話を12回録音した。ディスカッションは、3人あるいは4人のグループで、テーマを「CSをどう思うか」として3回行い録音した。

表1 インフォーマントの基本情報

名前	性	年齢	国籍	身分	生地	第一言語	第二言語	第三・四言語
C	女	21	日本・スイス	学部生	日本	日本語・ドイツ語*1		英語・フランス語
S	女	20	米国	交換留学生	米国	英語	日本語	なし
Y	女	20	日本・米国	学部生	日本	英語*2	日本語	なし
F	女	20	中国	学部生	中国	北京語	日本語	英語・広東語*4
E	女	19	日本・米国	学部生	米国	英語	日本語	スペイン語
K	女	19	日本・米国	学部生	米国	日本語	英語	フランス語
M	女	19	日本	学部生	日本	英語*3	日本語	フランス語
L	男	21	日本・米国	学部生	日本	日本語	英語	なし
H	男	19	日本	学部生	フィリピン	日本語	英語	タガログ語
T	男	18	日本・米国	学部生	米国	英語	日本語	スペイン語

表1にインフォーマントの性別、年齢、身分、国籍、生地、第一言語、第二言語、第三（四）言語をまとめた。インフォーマントの名前はプライバシーを配慮して、アルファベットで記した。アンケートの質問内容はKite⁽¹⁸⁾のものを参考にした。

7人のインフォーマントが第三（四）言語を持っている。三つ以上の言語を使用する人はマルチリンガルと呼ぶべきだが、本稿では日本語と英語に焦点を置いて述べるため、バイリンガルと記していく。

インフォーマントCは第一言語を日本語とドイツ語の両方としている。（表1の*1）インフォーマントCの父親はスイス人（ドイツ語圏出身）で、父親とはお互いにドイツ語で会話をする。母親は日本人で、母親とは日本語で会話をする。また、インフォーマントCには双子の妹がおり、妹とはドイツ語と日本語の両方で会話をする。両親同士は英語である。家族の中に日本語、ドイツ語、英語の三言語がある環境である。

インフォーマントSは米国・ハワイ州の日系四世である。ハワイには日系人が多いが、インフォーマントSの親友の一人も日系人でその家族とは親しく付き合っており、日本語に触れる機会は少なくなかったと思われる。

インフォーマントYの父親は日系三世のアメリカ人であり、日本企業で仕事をした経歴もあって、日本語が流暢である。母親は日本人である。インフォーマントYにとって、母語は日本語だが、よく使用するという意味での第一言語は英語である。（表1の*2）よって、第二言語は日本語となる。

インフォーマントFは中国生まれの中国人だが、両親の大学院入学に伴って児童期に来日し、日本の教育機関に通っている。両親は中国人だが、出身地が異なるためインフォーマントFの家族内では北京語が使用されている。その後の来日により家族間で日本語も使用するようになっていく。英語は中国の学校と予備校で学んだ。

インフォーマントEとTは姉弟である。インフォーマントEとTの両親は日本人であるが、青年期から米国ニューヨーク州で生活しており、EとTはニューヨークで生まれ成長している。インフォーマントEとTの家庭では日本語と英語が使用されると共に、スペイン人のベビーシッターとの接触からスペイン語も自然習得している。

インフォーマントKは父親の転勤のため米国で生まれ成長してきたが、アメリカの公教育と日本語補習校や通信教育で日本の教育も受けている。

インフォーマントMは日本生まれだが、乳児期と12才から14才までを父親の転勤のため米国で生活している。第一言語については、以前は日本語であったが、現在は英語である。（表1の*3）

インフォーマントLの父親はアメリカ人で母親は日本人である。父親とは英語だけで、母親とは日本語だけで話し、弟たちとは「混ぜ言葉」⁽¹⁹⁾を使用する。

インフォーマントHは、父親は日本人で母親はフィリピン人である。インフォーマントHはフィリピン生まれだが、外交官である父親の転勤で日本、米国、パキスタン、ハンガリーに数

年間ずつ生活し、現地の教育機関（使用言語は英語）、あるいは日本語学校（全日校）に通っている。日本語学校に在籍していない時は日本語補習校に通い、常に日本語の教育を受けている。

インフォーマントの家族間の使用言語は複雑である。インフォーマントKとMの家庭では日本語のみを、Sの家庭では英語のみを使用しているが、K、M、S以外の家庭では二つあるいは三つの言語が使用されている。複数言語が使用される場合、同じ二人の間で使用される言語が単一ではなく、複数であるものが多々見られる。複数使用が見られるのはインフォーマントCとその妹、Yとその弟、Fとその家族構成員、Eとその父、Eとその弟、Lとその弟、Hとその妹、Hの両親、Tとその父、Tとその姉の間である。姉弟であるインフォーマントEとTの父親との使用言語を比較すると、Eは父親と英語と日本語としているが、Tは父親へは日本語であり、父親はTへ日本語と英語を使用するという、姉と弟で異なる状況が見られる。また、インフォーマントEとTの家族間使用言語を見ると、日本人（日本国籍）の親とその子供であっても、親子間の会話が日本語でなされるとは限らないことがわかる。インフォーマントFの家族間使用言語を見ると、Fも両親も中国人だが、親子間、夫婦同士で日本語も使用することがわかる。家族構成員の国籍が表す国で最も使用される言語と、実際、家庭内で使用する言語が必ずしも一致しないことがわかる。

4. CSの機能的分析

4. 1 八つの機能

本稿ではガンパーズ⁽²⁰⁾、Nishimura⁽²¹⁾、Fotos⁽²²⁾が示したCSの機能をまとめ、①構成に関する機能、②意味に関する機能、③相互作用機能、④文体的効果機能、⑤言語習得に関する機能を取り上げ、検討する。また、この五つの機能の他に、⑥若者意識共有の機能、⑦ことば遊びの機能、⑧CS使用合図としての機能も見られることを仮定し検討する。いくつかの具体例を示しつつ、これら八つの機能を検討していく。会話例には、必要に応じて、会話参加者、ターン番号、日本語訳を記す。下線部分がCSのところである。

4. 2 分析

4. 2. 1 構成に関する機能

構成に関する機能とは、CSした部分が会話を円滑に推し進める機能、あるいは客観的事実の陳述と主観的意見の陳述の区分、情報の要求と提供の区分、独り言と対話者への話しかけの区分を明確にする機能である。ここでは、区分機能のCSの具体例を示す。(例1) インフォーマントEとCは学部の専門性について話しているが、Cは発話の後半「実際はどうかかわからない」をCSしている。インフォーマントCは、発話の前半で父親の発言、つまり、事実を伝えたものであるのに対し、後半で主観を述べている。CSさせることで客観的事実の陳述と主観的意見の陳述の区分をより明確にしている。

(例1)

- 1 E: Is that, I wonder if that's a good thing or a bad thing.
それは、それがいいものなのか悪いものなのかと私はあれこれ考えてる。
- 2 C: My dad keeps on telling me it's a bad thing. 実際はどんなのかわからない
父はそれが悪いものって私に言い続けているの。

4. 2. 2 意味に関する機能

意味に関する機能とは、基盤言語では意味伝達が困難なものをCSが補助したり、CSした語が使用されている社会文化を連想、喚起させたり、強調の意味をより増幅させる機能のことである。ここでは接頭語「超」を中心として、強調増幅機能について検討する。

強調増幅機能を持つCSには「超」「すごい／すごく」「でかい」「思いっきり」「早い」「ほんとに」「Too dangerous」、繰り返しによる「No 違う no」「まだまだ、they are still 元気」、「really まじで」「it's crazy すごいよ、もう」がある。特に接頭語「超」は全体で13回も使用され群を抜いている。接頭語「超」は、後続する語が表す内容が程度一杯をはるかに越えることを意味する。「超」は名詞、形容詞、形容動詞、副詞、動詞を取ることができる。「超」を用いた句や節を一つのCSと捉えると、「超日本だけの世界」、「超暇人」「超元気」、「超微妙」、「超らくちんで」「超赤い」「超知りたかった」「超見たくないみたいな」「超時間かかる」が英語基盤の文の中に見られる。また、「超」に英語の形容詞が後続して、形容詞句を作っているものがある。「超typical」「超crazy」、会話9に「超turquoise-colored」、「超nervous」「I feel 超like suppressed.」「超 calm」「超weird」がある。インフォーマントEの発話においては「超」と「turquoise-colored」の間にフィラーがあるが、Eが色をどのように言い表すか迷っているからだろう。下に「超turquoise-colored」が含まれる会話を示す。(例2) 実際、インフォーマントEは、ディスカッションの中で、CSさせた「超」は「really」「very」よりインパクトがあるので、より感情を表すことができると話している。

(例2)

- 1 C: Whose 着物 are you wearing?
誰の着物を着るつもり。
- 2 E: My mom's.(C:ふううん)It's very, very 派手。(T: Yeah?) It's 超, it's like kina turquoise-colored, and it has a lot of gold, (C: wow), like so much gold, I like,
私の母のもの。(ふううん) とてもとても派手なの。(そうなの) 超トルコ色で、金色がたくさんあるの(わあ) 金色が多くて、私は気に入っている。

4. 2. 3 相互作用機能

相互作用機能とは、助詞「ね」、両言語での繰り返し、ポートマントウセンテンスなど、CS

した言語が持つ特徴を有効に利用して対話者に働きかけをする機能のことである。助詞「ね」は確認要求のモダリティを表し、「ね」は終助詞としても間投助詞としても働くことができる。特に文末に来る終助詞は話し手の気持ちや対話者の様子を図り、モダリティを決定することができる。両言語での繰り返しは、発話者を含める会話参加者の基盤言語に合わせて、一つの命題を両言語で言い表すことによって、会話参加者全員に働きかけようとするものである。

Nishimura⁽²³⁾ はポートマントウセンテンス (Portmanteau sentences) という繰り返し表現を呈示している。日本語と英語のそれぞれの主語・動詞・目的語の語順を守りながら文の最後に動詞か目的語をCSさせて続けるものである。Nishimuraは日系二世が会話参加者の背景や使用言語を考慮しながら、ポートマントウセンテンスを用いることで話者全体に話しかけようとする述べている。下にポートマントウセンテンスの語順を図式で表す。

- Ⓐ S (英語) + V (英語) + O (英語) + V (日本語)
- Ⓑ S (日本語) + O (日本語) + V (日本語) + O (英語)

Ⓐは、最後の動詞が日本語にCSされたものだが、日本語の動詞はその前に目的語を取るという性質があるのでこの語順が可能である。Ⓑは最後の目的語が英語にCSされたものだが、英語の目的語はその前に動詞を取るという性質があるのでこの語順が可能である。

ここでは、インフォーマントEによる動詞と副詞句のポートマントウセンテンスの例を下に示す。(例3) インフォーマントEがスペイン語の授業を履修している学生たちの発音について話しており、動詞「speak」の後に、「in like カタカナっぽく」を挟んで、再度「言ったら」とCSした日本語の動詞を使用している。まず、「in like カタカナ」で十分意味は伝わるのだが、接尾詞「っぽく」を「カタカナ」に続け、「in like カタカナっぽく」という副詞句を作っている。次に「speak」、「in like カタカナっぽく」、「言ったら」の語順を分析してみる。英語では動詞の後には副詞句を取ることができ、日本語では動詞の前に副詞句を取る。よって、「you speak in like カタカナっぽく言ったら」は一つの文の中に、副詞句を挟みながら動詞を二回続けるポートマントウセンテンスになっている。

(例3)

E : Ummmmm, kind of kind of, like their accent's pretty good, because for Spanish

if you speak in like カタカナっぽく言ったら, it kind of sounds like Spanish だから。

ううううん、なんていうか、アクセントはかなりいい、だって、カタカナっぽく言ったらスペイン語の音みたいだからね。

動詞 + 副詞句 + 動詞

英語 英語/日本語 日本語

この発話がある会話の参加者はインフォーマントE、Kで、基盤言語を英語としている。インフォーマントE、Kは二人とも米国育ちで第一言語は英語であり、インフォーマントEのポートマントウセンテンスは、表面的には、Nishimuraの言うように英語話者と日本語話者の両方に働きかけようとするものではない。しかし、ディスカッションの中で、インフォーマントE、K両者共、日本の大学入学をよい機会として自分の日本語を上達させ完全なものになりたいと何度も言っている。この会話の中で、対話者Kを英語話者、話し手自身(E)を暫定的日本語話者、あるいは反対に、対話者Kを暫定的日本語話者、話し手自身(E)を英語話者と解釈すればNishimuraのポートマントウセンテンスの機能がインフォーマントEの使用にも当てはめられるかもしれない。

4. 2. 4 文体的効果機能

文体的効果機能とは、CSにより、直接話法によるせりふの部分に明確に示し、ドラマティックに表現するものである⁽²⁴⁾。インフォーマントEは友人との会話を再現している。(例4)友人とは発話の中で「she」が表す人物のことである。実際の会話を引用するところをCSしている。「え、今」と「うん、食べたい」を検討する。「うん、食べたい」と言った「she」もインフォーマントEもバイリンガルなので、実際の会話は英語で話されたかもしれないが、日本語にCSしている。CSすることで、そこがせりふの部分であることを明確にし、浮き立たせ、ドラマティックな効果を出している。一方「it's so good」はCSせず、そのまま英語だが、実際は日本語だったかもしれない。しかし、その後が続く「なんか道歩きながら食べてて」をCSさせることで、会話の再現が終わり、状況説明になったことを効果的に表現している。

(例4)

E: And I'm like, 「え、今？」 and she's like 「うん、食べたい。」 So we go to like a Family マート、she like buys it, she's like “ it's so good.” なんか、道歩きながら食べてて。

それで、私が「え、今」って聞いたら、彼女が「うん、食べたい」って言ったの。それで、私たちはファミリーマートに行って、彼女はそれ(大福餅)を買って、「とてもおいしい」って言った。なんか道歩きながら食べてて。

4. 2. 5 言語習得に関する機能

インフォーマントたちは自身を偏重バイリンガル⁽²⁵⁾であると自覚し、日本語、英語、あるいは他の言語の能力を高めたいと思っていることがわかる。インタビューやディスカッションの中で、インフォーマントFはAmerican Englishが話せるようになりたいと言い、Cは第一言語がドイツ語、第二言語が日本語、英語が第三言語であり、自身の英語は発音が変であり、今日本の大学で勉強しているのは日本語を上達させるためだと言っている。インフォーマントE、Kも同様に日本語を上達させたいと言っている。

スウェインは第二言語習得において、理解可能なアウトプットは第二言語の習得に有効であるといい、アウトプットにより学習者の中間言語と目標言語とのギャップに気づき、アウトプットによって仮説を検証し、学習者自身が自身のアウトプットを話題にすることで問題解決をすることができる⁽²⁶⁾と主張している。また、オックスフォードは学習者が目標言語を習得するときに用いる知的手段を「学習ストラテジー」として提案している⁽²⁷⁾。「学習ストラテジー」の一つである「社会的ストラテジー」とは、目標言語の母語話者や自分より目標言語能力が高い人に対する質問ややりとりを通して習得しようとする方略であるが、このストラテジーを用いて言語習得を試みている会話例を示す。(例5) インフォーマントMは、ターン1でYにスキー旅行は一泊するのかと聞いた。ターン2で、Yは「日帰り」で行くことを日本語で言おうとするが、「日帰り」という語が思い出せない(あるいは定着していない)ので「朝出て」というアウトプットを用いてMに質問している。インフォーマントYの期待通りターン3で、Mが「日帰り」という語を提出し、ターン4でYは「うん、日帰り」とアウトプットしている。インフォーマントYは後に記録した会話で「日帰り」を使っており、このことから言語習得が成功したといえるだろう。

(例5)

- 1 M: mm みんな長野だよな。(Y: ね) One, one night?
うーん みんな長野だよな。(ね) い、一泊。
- 2 Y: m? it's like 朝出て, it's like,
うん、なんか朝出て、なんか
- 3 M: Oh, 日帰り?
ああ、日帰り。
- 4 Y: うん、日帰り。

4. 2. 6 若者意識共有の機能

インフォーマントの発話の中には日本語にCSした集団語が多数見られる。「バイト」「サークル」「(サークルの)勉強会」「(サークルの)緊急ミーティング」「コースナビ(ゲーション)」「**教授の苗字**ちゃん(教授のあだ名)」「中級」「オープン科目」「少人数(編成の授業)」「やまんば」「四月生(四月入学の学生)」「ギャル」「就活(就職活動)」「正門」「自習室」「twenty two(校舎を表す番号)」「まるきゅう、いちまるきゅう(渋谷にある若者に人気のあるファッションビルで“いちまるきゅう”、略して“まるきゅう”と呼ばれる)」「しかなくない?(平板式アクセント)」「みたいな」「超」「てか」「いってる」「微妙」がある。英語の中には若者らしい表現、「like」の多用がみられるが、CSとしては用いられていない。

下の会話は英語基盤の会話の中で見られるCSである。(例6) インフォーマントE、Kは来学期の履修計画について話している。ターン1でインフォーマントKは、担当する教授の名前

をCSしてあだ名で呼んでいる。あだ名というものは仲間ことばの一つである⁽²⁸⁾。あだ名で呼ばれている教授はオーストラリア出身であり、名前は英語である。あだ名は教授の名前の後半部分を省いたものに日本語の「ちゃん」を付加した作りになっている。Professor Smithを「スミちゃん」と呼ぶようなもので、軽妙さが感じられる。ターン3で再度、あだ名を用い、「なくない」(「く」で高くなる平板式アクセント)という若者ことばを使っている。仲間ことばや若者ことばを使うことで、日本の若者であること、同じ大学で学ぶ学生であるという意識を共有している。

(例6)

- 1 K: 教授の名前ちゃんの?
- 2 E: I don't think I wanna take.
私は取りたくないな。
- 3 K: But I thought 教授の名前ちゃんのしかなくない?
でも教授の名前ちゃんのしかなくないって思った。

4. 2. 7 ことば遊びの機能

ことば遊びとはことばの音・リズム・意味などを利用した遊びであるが、ことば遊びの機能とは、CSがCS無しでは実現できなかったことば遊びを成立させるものである。下の例には、音節と拍を利用したことば遊びが見られる。(例7) インフォーマントMは聞き取りに失敗したため、ターン2で反復要求をし、ターン3の返答でMは「Bond University」を理解することに成功している。インフォーマントMはターン4で「Bond University」の所在地についての情報要求をしたが、ターン5でLはCSして「シドニー」と答えている。インフォーマントLはMがSydney (シドニー) をたやすく理解できることは知っているが、聞き取り失敗を防ぐためという表向きの理由でLはCSしたと思われる。しかし、実際はインフォーマントM、Lは日本語「シドニー」をいかにも日本語らしく発音することをお互いに示し合い、その音の違いを楽しんでいる。M、Lの「シドニー」は母音をはっきりと発音し、長音をしっかり伸ばしているものである。「Sydney」が2音節であるのに対して、「シドニー」は3音節4拍であることの違いを楽しんでいる。ターン6の(笑い)では、もう一人の会話参加者Hも一緒に笑っているが、このことがことば遊びであることを明確にしている。

(例7)

- 1 L: Bond University っていうところ。
- 2 M: Bon?
- 3 L: Bond B, O, N, D (M: aah) Bond University. Bondy
- 4 M: Wait, where is it at?
待って、それはどこにあるの。
- 5 L: シドニー。

6 M : シドニー。(笑い)

4. 2. 8 CS使用合図の機能

CS使用合図の機能とは、CSによってCS使用開始と使用継続を示し、相手にCS使用を承認させ勧誘するものである。次にインフォーマントF、Kの会話を検討する。下の例は会話の冒頭部分である。(例8) 会話は全体的に英語を基盤としており、ターンは212ある。会話の冒頭ターン1でインフォーマントKはFに使用言語の選択をゆだねているが、ターン2でFは「Japanese, Japanese.」と英語で答えながらも、実質的には英語で話し続けることによって英語を選択している。

(例8)

1 K : I'm following you. Wait, do you want to, you're going to Japanese or English?

Which is better for you? 日本語の方がうまい?

私はあなたに合わせる。待って、日本語で話したい、それとも英語。どっちがいい。日本語のほうがうまい。

2 F : Japanese, Japanese. Yeah, because I stayed here, in Japan, from 1991 to 1997.

日本語、日本語。うん、1991から1997までここ、日本に住んでいたから。

会話が始まって間もなく、インフォーマントFはCSをし、「うん」「そう」などの相槌をする。Kは相槌も含めて全て英語である。インフォーマントFは英語で話そうとしたはずだが、自ら日本語にCSをして相槌をしているのである。ターン38で初めて、インフォーマントKは「漢字」というCSをする。ターン28からターン64まで、国語学習の話題であるが、ターン38のCS「漢字」を機にインフォーマントFによる「国語」「あいうえお」「漢字ドリル」、Kによる「補習校」「あー、あった、あった」のCSが見られる。「漢字」「国語」「あいうえお」「漢字ドリル」「補習校」は英語では言い表しにくく、そのことば自体が日本社会に強く結びついているためCSは至極当然に思える。しかし、インフォーマントKの「あー、あった、あった」はどうだろうか。インフォーマントKとFによる「漢字」等の名詞単位の頻繁なCSに誘発されているように思われる。ターン38でのインフォーマントKのCS「漢字」もインフォーマントFのCS(日本語による相槌)がKのCSを誘発しているように考えることもできる。

この会話の話題は、ターン65からアメリカと日本企業ビジネスパーソンの働き方、忙しさ、大学生活の話などに変わっていく。その中でもインフォーマントFは相槌として日本語を多用するが、「残業」「留学生とかいっぱいいるし」などCSが散発的にみられる。ターン170から200までは履修の話題であるが、相槌、名詞、文のCSが多数見られる。

会話全体を概観すると、はじめのうち、CSはインフォーマントFの相槌だけであるが、ターン38のCS「漢字」を始まりとして名詞単位のCS、やがて文単位のCSが見られるようになり、

話題が変更すると一旦、CSが減少し、再度CSが始まり、CSの頻発が起こる。

以上から、CSそのものがCSの開始宣言であり、継続使用宣言であり、且つ対話者へのCS使用勧誘になっているようである。対話者がCSをすることにより、CS使用の承認と勧誘の成功を見ることができる。

4. 3 分析結果

本稿の4. 2では分析の一部を述べたが、詳しくは筆者の小論⁽²⁹⁾を参照願いたい。

構成に関する機能については、CSした相槌や接続詞が会話を促進し、CSが客観的事実の陳述と主観的意見の陳述の区分、情報の要求と提供の区分、聞き手の区分の明確化に役立っていることがわかった。意味に関する機能については、CSが基盤言語では伝えられない、あるいは伝えにくい概念を補充すること、基盤言語をマジョリティの使用言語として使われている社会、文化に、より容易に結びつけること、強調の機能を持つ語がCSによって、その語の持つ強調の意味をより増幅させることを確認した。接頭語「超」は英語にも接頭語として使用されていることがわかった。相互作用機能については、CSした助詞「ね」などが対話者の注意を保持し、両言語での同じ内容の繰り返しとポートマントウセンテンスは会話に参加している人全てに語りかける機能を持つことを確認した。文体的効果機能については、CSしたせりふの部分が地の部分から浮き立ち、ドラマティックな効果を表していることが確認できた。言語習得の機能については、会話を一時休止させ、対話者にCSして質問することで言語習得を試みることがわかった。若者意識共有の機能については、英語を基盤とする会話の中に見られるCSした若者ことばや仲間ことばが、バイリンガルであり、且つ現代日本の若者であること、あるいは大学(学部)に所属している意識を対話者と共有する助けをしていることを確認した。ことば遊びの機能については、CSによって言語の持つ音や韻を踏み楽しむことが見られた。CS使用合図の機能として、CSそのものがCS開始宣言、使用継続宣言となり、対話者にCSすることを勧誘することがあることを確認した。一つのCSが複数の機能を持つことも確認できた。

また、インフォーマント全員がCSをすることも確認できた。

分析を始める前に、八つの機能を呈示したが、先行研究が既に呈示していた五つの機能、①構成に関する機能、②意味に関する機能、③相互作用機能、④文体的効果機能、⑤言語習得に関する機能が本稿の会話記録にも見られた。また、筆者が仮定した三つの機能、⑥若者意識共有の機能、⑦ことば遊びの機能、⑧CS使用合図の機能も本稿の会話記録に見られることを確認できた。

これらの八つの機能を分析検討した結果、八つの機能を次の三つに集約できるだろう。一つ目は、構成、意味伝達、モダリティ、聞き手の明確化である。二つ目は、アイデンティティ表現である。三つ目はCSそのものが会話スタイル変化に影響力を持つということである。

5. インフォーマントによるCSに対する考え方

インフォーマントは言語使用、第二言語習得・第三言語習得に対して意識的、且つ意欲的であり、言語使用に対して見解を持ち、表現する能力が十分であると推測し、CSに対する考え方を参考にすることはCSの考察に大いに有意義であると考えた。ディスカッションのテーマは「CSをどう思うか」である。ディスカッションは、3人あるいは4人のグループで、3回行い録音した。会話資料とインタビューの自己申告の内容から補いながら、インフォーマント自身のCSに対する考え方を整理する。

1) CSに対して抵抗感があってもCSをする。

一回目のディスカッションにおいては、CSに対する強い抵抗の意見が出た。言語能力の衰退あるいは上達の妨害になると感じられること、CSに慣れ親しんでいる集団への反発、一つの言語で会話を完結しようとする自己の中での圧力、日本人であれば日本語で正しく話さなければいけないという他者からの圧力が原因となってCSに対する抵抗感を持っている。しかし、実際の会話ではCSに抵抗を示したインフォーマントもCSをしている。

2) CSは会話促進・明確化・強調を容易にすることができる。

殆どのインフォーマントが、出力しやすいことばを選択することによって会話が滞ることなく命題を適切に伝え、伝えたい意味の強調を助けると述べている。会話促進・明確化・強調を容易にするために、意識的にCSをすることもあり、CSそのものが会話スタイルとして好まれ、ひいては会話促進を容易にすることもあるという。

3) CSに慣れ親しんでいる集団に反発を感じるインフォーマントがいる。

自身より頻繁にCSを使用する集団が存在すると捉えており、その集団のCSとその影響力に反発を感じるインフォーマントもいる。その集団のCSをする会話スタイルに反発を感じながらも、その集団との相互行為を通して、自らもCSを使用するようになり、意に反した自らの変化にジレンマを感じている。

4) CSはCSを促すことがある。

仲間と話している時、その中の一人がCSを始めれば他の人も始めるが、インフォーマントの一人は、CSを自身は使用しないことにしていると言っている。しかし、そのインフォーマントは、会話記録の中でCSをしていることを付記しておく。また、一方で、意識的にCSを使用することもあると言うインフォーマントもいる。

5) CSはアイデンティティ⁽³⁰⁾を表現することがあると言っている。

一つの言語がその言語を使用する集団のアイデンティティを表すことは容易に理解できるが、CSそのものがバイリンガルのアイデンティティを表すことがある。

ディスカッションの結果は、4で述べた機能的分析を補償すると同時に、4の分析では知りえなかったことも教示している。その一つは、CSに抵抗感があっても相手がCSをすればCSをするということ、CSをする仲間に反発を感じてもその仲間と話すときはCSをしてしまうということである。4. 2. 8で、CSはCSの使用開始宣言、CS使用継続宣言、CS使用勧誘になる

という結果が出たが、CS使用勧誘の影響力はバイリンガル自身の言語使用コントロールを超える力があるようだ。もう一つは、CSはバイリンガルのアイデンティティを表すことがあるということである。

6. おわりに

話し手は、コミュニケーションにおいて、相手に伝達したいことを瞬時に、最も適切な表現を選択し、出力している。相手に伝達したいことには、わたしらしさ、アイデンティティの感覚も含まれる。最も適切な表現とは、聞き手に容易に理解され、場面にふさわしく、わたしらしく、出力可能なものである。バイリンガル同士では、最も適切な表現の選択肢の中にはCSが含まれる。バイリンガル同士は、CSした表現が最も相手に伝達しやすく、わたしらしく、場面にふさわしく、出力可能であればCSを選択するのである。話し手聞き手の間にCS使用の是非が未合意であれば、どちらかがCSすることでCS使用が承認される。つまり、日本語英語バイリンガル大学生はバイリンガルである故に、バイリンガル同士のコミュニケーションにおいてCSの選択肢を持っているのである。よって、CSは、バイリンガル同士のインフォーマルな会話の中において、至極当然な現象であると言える。小論での考察がバイリンガルの会話スタイルの理解に有効であると確信する。

【註】

- (1) 宮原温子 「日本語英語バイリンガル大学生の言語使用状況」『目白大学人文学研究』第7号、p.181-196。
- (2) Appel, Rene & Muysken, Pieter. Language contact and bilingualism, London: Edward Arnold, 1987, p.177.
- (3) ICUと上智大学の国際教養学部（2006年までは比較文化学部）、宮崎県の宮崎国際大学（1992年設立）、新潟県の国際大学（1982年開校）、大分県の立命館アジア太平洋大学（2000年開校）、早稲田大学国際教養学部（2004年開設）、法政大学グローバル教養学部（2008年開設）がある。
- (4) 総務省統計局 『日本の統計』1997年、2004年、2009年。
- (5) 国籍留保とは外国で生まれた日本国民で、かつ、出生により外国国籍も取得したものは重国籍者となるが、日本国籍を失わないようにするため出生から3ヶ月以内に届け出ること。
- (6) 法務省民事局 『平成9年度戸籍事件表（平成9年4月1日～平成10年3月31日）』平成10年9月、『平成18年度戸籍事件表（平成18年4月1日～平成19年3月31日）』平成19年9月。
- (7) 地域別子女数とは日本国籍を持つ小・中学校就学年齢の子供の数。
- (8) 外務大臣官房領事移住部領事第二課 『海外在留邦人数調査統計』昭和52年（昭和51年10月1日現在）、『海外在留邦人数調査統計』昭和62年（昭和61年10月1日現在）、外務大臣官房領事移住部領事移住政策科『海外在留邦人数調査統計』平成9年（平成8年10月1日現在）、外務大臣領事局政策課『海外在留邦人数調査統計』平成19年版（平成18年10月1日現在）。
- (9) Gumperz, John J. Discourse Strategies, Cambridge University Press, 1982.の日本語訳、ジョン・ガンパーズ 『認知と相互行為の社会言語学 ディスコース・ストラテジー』井上逸平他訳、松柏社、2004年、p.94-134。
- (10) Appel, Rene & Muysken, Pieter 前掲、p.118.

- (11) 岡秀夫 「コード・スイッチングをめぐる諸問題」 『松村幹男先生退官記念英語教育学研究』 溪水社、1995年、p.122-125。
- (12) Grosjean, Francois. *Life with Two Languages*, Cambridge: Harvard U.P., 1982, p.308.
- (13) Nishimura, Miwa *Japanese/English code-switching: syntax and pragmatics*, NY: Peter Lang Publishing, 1997.
- (14) Fotos, Sandra S.. "Japanese-English Code Switching in Bilingual Children" in *JALT Journal*, volume12, No. 1, 1990. Fotos, Sandra S.. "Codeswitching by Japan's Unrecognized Bilinguals: Japanese University Students' Use of Their Native Language as a Learning Strategy" in *Studies in Japanese Bilingualism*, Clevedon: Multilingual Matters Ltd., 2001.
- (15) Kite, Y.. *Japanese/English codeswitching: The structure of codeswitching as an unmarked choice and its relation to language proficiency*, Michigan: UMI dissertation services A Bell and Howell Company, 1996.
- (16) Furuya, Noriko. "Attitude Toward Japanese-English Code-Switching", 『文化女子大紀要 人文・社会科学研究』, 1999.
- (17) 服部圭子 「接触場面における日本語非母語話者のコードスイッチング—機能を中心に—」 『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』 第5号 2001年。
- (18) Kite 前掲, p.202.
- (19) インフォーマント自らアンケートの回答に「混ぜ言葉」と記入した。インタビューで確認したところ、別名「ちゃんぽん」とも言い、日本語と英語を一つの会話の中で混ぜて使うことで、「混ぜ言葉」と言う語は兄弟友人の中で知られていると説明してくれた。すなわち「混ぜ言葉」「ちゃんぽん」はCSのことである。
- (20) ガンパーズ前掲, p.94-107。
- (21) Nishimura 前掲, pp.131-158.
- (22) Fotos 前掲1990, pp.83-96.
- (23) Nishimura 前掲, pp.103, 141.
- (24) Nishimura 前掲, p.15.
- (25) 山本雅代 『バイリンガル』 大修館書店、1991年、p.15。
- (26) Swain, Merrill "Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development" in *Input in Second Language Acquisition*, MA: Newbury House, 1985, p.252.
- (27) Oxford, R. L *Language Learning Strategies : What Every Teacher Should Know* NY: Newbury House, 1990, pp.170-172.
- (28) 森岡健二・山口仲美 『命名の言語学』 東海大学出版会、1985年。
- (29) 宮原温子 『平成20年度目白大学大学院国際交流研究科言語文化交流専攻修士論文 日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチングの一考察—機能を中心に—』
- (30) 西平直 『エリクソンの人間学』 東京大学出版会、1993年。フリードマン、ローレンス・J. 『エリクソンの人生：アイデンティティの探求者、上・下』 やまだようこ、西平直監訳；鈴木真理子、三宅真季子訳、新曜社、2003年。

【参考文献】

- エリス、ロッド 『第二言語習得のメカニズム』 牧野高吉訳、筑摩書房、2003年。
- 岡秀夫 「コード・スイッチングをめぐる諸問題」 『松村幹男先生退官記念英語教育学研究』 溪水社、1995年。
- ガンパーズ、ジョン 『認知と相互行為の社会言語学 ディスコース・ストラテジー』 井上逸平他訳、松柏社、2004年。
- 西平直 『エリクソンの人間学』 東京大学出版会、1993年。
- 服部圭子 「接触場面における日本語非母語話者のコードスイッチング機能を中心に」 『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』 第5号 2001年。
- 宮原温子 「日本語英語バイリンガル大学生の言語使用状況」 『目白大学人文学研究』 第7号。
- 宮原温子 『平成20年度目白大学大学院国際交流研究科言語文化交流専攻修士論文 日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチングの一考察—機能を中心に—』
- 森岡健二・山口仲美 『命名の言語学』 東海大学出版会、1985年。
- 山本雅代 『バイリンガル』 大修館書店、1991年。
- Appel, Rene, & Muysken, Pieter. Language contact and bilingualism, London: Edward Arnold, 1987.
- Fotos, Sandra S. "Japanese-English Code Switching in Bilingual Children" in JALT Journal , volume12, No. 1 1990.
- Fotos, Sandra S. "Codeswitching by Japan's Unrecognized Bilinguals: Japanese University Students' Use of Their Native Language as a Learning Strategy" in Studies in Japanese Bilingualism, Clevedon: Multilingual Matters Ltd., 2001.
- Furuya, Noriko. "Attitude Toward Japanese-English Code-Switching", 『文化女子大紀要人文・社会科学研究』、1999.
- Grosjean, Francois. Life with Two Languages, Cambridge: Harvard U.P., 1982.
- Gumperz, John J.. Discourse Strategies, Cambridge University Press, 1982.
- Kite, Y.. Japanese/English codeswitching: The structure of codeswitching as an unmarked choice and its relation to language proficiency, Michigan: UMI dissertation services A Bell and Howell Company, 1996.
- Nishimura, Miwa. Japanese/English code-switching: syntax and pragmatics , New York: Peter Lang Publishing, 1997.
- Oxford, R. L Language Learning Strategies : What Every Teacher Should Know NY: Newbury House, 1990, pp.170-172.
- Swain, Merrill "Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development" in Input in Second Language Acquisition, MA: Newbury House, 1985.

【付記】

本稿は平成20年度目白大学大学院国際交流研究科言語文化交流専攻修士論文『日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチングの一考察—機能を中心に—』の3章、4章に加筆修正したものです。